



## 倉橋先生の思想と生活

及 川 ふ み

今年には倉橋先生の十年祭を迎え、先生の追想話を入れようという講習計画を伺い、先生と長くご一緒におりました一人として本堂に先生の業績を考える時期として、大変うれしく思いました。

私は大正五年から比較的側近におりまして先生の指導を受けたのですが、先生が周囲の者を指導なさいますのに、子どもを育てる気持ちと同じく「自分から育つものを育てるのだ」ということで、外から積極的に教えられたということは少いので、この「倉橋先生の思想と生活」という演題をいただきまして少し当惑いたしました。

そして一か月ほど前から先生の著書を順々に朝に晩に読み直してみましたのでございます。先生とは長くご一緒におりましたが特別の席を設けて、幼児教育についてのお話することは割合に少なく、むしろこのような機会（講習会などで）にみなさんと講堂に一語に聴くということのようでしたので、あらためて自分が先生の著書により、勉強しなければならぬはめになったのです。

そこで先生の著書をひとつおとり上げますと、昭和六年に「就学前の教育」(岩波講座 教育科学の一部)が出ています。これは先生の幼児教育の思想がよくまとめられ、理論的に書かれています。私はこの「就学前の教育」が先生の幼稚園教育の理論についての参考になりましたと思います。その後昭和九年に「幼稚園真諦」をお出しになりました。又昭和十一年に「育ての心」、昭和二十九年に「子供讃歌」その前に大正十五年に「幼稚園雜草」が出ております。「幼稚園真諦」「育ての心」は実際の教育の計画とか方法についての先生の意見が表わされているようです。「子供讃歌」は先生の旧制の高校時代から晩年までのことを書いておられたもののようです。これは「倉橋惣三選集第一巻」に載っています。「就学前の教育」をおまじめになった経過がよくうかがわれます。「子供讃歌」の目次は、(一)白線帽の青年①お茶の水幼稚園の兄ちゃん②メドウ・キングダールテン③最初のベスタロッチ伝、(二)角帽生の子供遍歴、(三)子供道

樂、(四)絵の子供、(五)保育理論研究者、などであります。この中で最初のベスタロッツ伝、先生はこれをよくお読みになりました、大変感銘深くされています。これは高校時代のことです。また(五)の保育理論研究者の中の「古い書庫」はお茶の水幼稚園の古い書庫のことです。先生は明治四十三年頃女高師の講師になりました。そしてその前は学生として心理学の研究生、その後児童心理学の研究生として専門の心理学の研究のかたわら、研究の材料とするためにはなく大変子どもがお好きであったため、大学の行き帰りにいつも附属幼稚園にきて、子どもと遊んでいらっしやったのです。

それがたまたま女高師の高師におなりになり、今度はお自分が遊ぶための幼稚園の遍歴というよりも、むしろ実際のみじかな必要なことにもなつて、幼稚園にもしばしばいらっしやったのです。講師でしたので幼稚園には直接ご関係はないのです。当時女高師の四年になりますと先生の児童心理学の講義がありました。先生はお話が上手で、ききほれてしまうことが多く、ノートをとる暇が全くないような状態でした。このように先生は講師でしたのでいつも附属幼稚園には出入りしていらっしやったわけです。

大正五年私が幼稚園に就職いたしました頃、先生が幼稚園の職員室のソファーに腰掛けて本を読んだり幼稚園の子どものことをお話ししていただいたのをよく思い出します。とにかくその頃は先生は大いに必要にせまられたと申しますか、趣味で子どもと遊んでいる段階から今度は少し本格的に子どもを研究しようというようなお気持ち

で、幼稚園の園舎の奥の方にあった、本当にカビ臭い一室に沢山古い書物が入っていて、この古い書庫の中にいちいち研究なさる材料がありまして、それには、先生と共著で新庄先生がお書きになった幼稚園史によくかかれています、明治のはじめの幼稚園の翻訳書が書庫に沢山あって、これを先生がひきずり出してはよくお読みになったのです。そうしているうちに翻訳書ばかりではいけない、原典をよく調べ、本当のフレイベルの保育精神をつかまなければならぬということから、フレイベルの研究にお入りになったわけです。これは「フレイベル」としてこの著書の中に詳しく出ておりますが、とにかく先生の幼稚園教育の思想の大きなとはベスタロッツとフレイベルによるところが大きいのです。

ところがフレイベルの原典を読み、フレイベルの幼稚園教育の精神を把握し、その後外遊なさつてフレイベルの研究所遺跡をお訪ねになられたりしておりますが、その前に原典をお読みになつて以来、今フレイベルの流れをくんでいる世界中の幼稚園の行き方が本当のフレイベルの精神を忘れて、枝葉にわたつた保育形式をとつているということを大変疑問に思われ、これは何とかしなければならぬという気持ちをもっていらっしやったのです。

当時の附属幼稚園主事の安井哲子先生と学習院幼稚園主事の野口ゆか先生が、いつも倉橋先生を囲んで本当のフレイベルの精神を聴き、幼稚園教育のあり方についていろいろと研究してましたが、当時まだ倉橋先生は自分が考えたことをすぐ実践に移すというのではな

く「だけれが、それを実践すればよい、そうすれば自分がうしろからこれを後おしする」というように直接行動に出るということをしひかえるというお気持ちが先生のどこかにあったように感じます。そういうことから二人の先生に新しい幼稚園原理、フレイベルの本当の精神をつかんだ保育精神をおっしゃりながら「実践はあなたたちがして下さるんですよ。」というような様子でした。けれどもやはり今の幼稚園のあり方はなんとかしなければならぬとは考えても、実践に移すという段階になると躊躇なざることが多かったのです。「子供讃歌」の中にも書いてありますが、この幼稚園の古い書庫あるいは幼稚園の保育室中であつては、どことなしに自分の疑問になっているフレイベルの精神からそれた保育がそのままだよつてゐる。しかし庭に出ると幼稚園の庭は広く大きな木もあり広い藤棚もあり、その下には砂場があり、子どもが自然の生活をしている。このように戸外では多にフレイベルの本当の精神をつかんだ子どもの生活状態であり、一歩部屋に入れば精神をまちがった枝葉にわたつた抽象的、概念的形式主義の保育が行なわれているといふので、先生の気持ちは、はつきりしない状態だつたのです。私が今考えますと、大正五年頃私が就職した時は、先生は「古い型がまだそこに残つてゐる。それを勇敢にしりぞけるといふこともできない。だからといつてこのままでは困る。できるだけ戸外保育ではフレイベルが山で子どもたちと遊んだような本当の保育状態にもどしたい」といふような気持ちであつたように感じられるのです。

当時の附属幼稚園主事安井先生は、(のちに倉橋先生に自分の椅子をおゆずりになり東京女子大学の学監となられた)幼稚園の教育についても研究してました。私が勤めました時には主事はこの安井先生だつたのです。その頃の様子を倉橋先生の「子供讃歌」からみますと安井先生は附属幼稚園教育の種々の点を考えておられて自分の気持ちを充分にもちながら徐々に今の幼稚園を本当の姿に改善しようといふようなことを相当、いろいろな点で倉橋先生とお話合ひしていらしたようです。

私が勤めた時には全然古い恩物といふようなものは使つておりませんでした。しかしまだ積木は積木として恩物をくずした積木で果物かごのようなザルに入れて、立方体も長方体も沢山ありました。又床の上で積む積木(床上積木)も安井先生の時にお作りになつたようです。現在使用しております床上積木は机の上の小さな積木を大きくしたようなもので、なんでもないのですけれど恩物の積木からそのような積木に移るといふことは、大変な勇氣と確信をもつてしなければできないことなのです。また当時ある新聞社で婦人子供博覧会が開催されまして幼稚園からの出品として、安井先生がお考えになつて床上積木で犬小屋をこしらへ、そこにぬいぐるみの犬を入れてそれを子供のひとつの遊びといふことで出品したのです。こういうものを博覧会に出すということが最も新しい形であるとして出品したわけでしょう。このぬいぐるみの犬を選ぶにも大変な苦勞がありまして銀座を歩きまわり、ようやく犬をみつけたような状

態でした。このように安井先生も倉橋先生の助言で幼稚園を新しいものに移そうと努力なされた時期だったので。

大正六年十一月倉橋先生は女高師の教授、幼稚園の主事におなりになりました。そこで今までもっていたあいまいなものはっきりしなければならぬ時期になったわけです。先生は「なんだか今やっている幼稚園のやり方は変だ。とにかく朝の会集だけはやめましょうね」と言われました。これは先生としては大英断なのです。先生はこのようにはっきりおっしゃることはなかなかならなかったのです。これを一番喜んだのは私なのです。というのは私は新参であつたことは朝の会集に司会者になつたりピアノを弾いたりすることです。これ等を会集解消により、やらなくてもよいということ。就職後一番うれしかったことなのです。その後先生は「会集は私の発意によりやめますけれども、なにか今の幼稚園はフレールベルの精神を忘れた、子どもを指導するのに適当なやり方ではない。ただ皆さんは實際家だから私は何も指示しませんから何でも自分で考えてやってみたいと思うことはどんどんやってみませんか。」とおっしゃいました。その時、五才児を受けもっておられた先生が大変保育技術の巧みな方でして倉橋先生の保育精神をよく理解し、又大変まめな方でいろいろなことを自分で積極的にしようという意欲の盛んな方でした。その先生は遊戯室に大きな動物園をお作りになつたのです。それは床上積木が作った犬小屋の類ではないのです。

以前の附屬幼稚園の大きな遊戯室の壁面いっぱいになるような象をラシャ紙をいくつもつないだ大ききで作り、片方には大きなライオンを作るといふように、一足飛びに小さな机の上の折紙などの細かい仕事から倉橋先生の暗示により大きい、子どもたちの製作活動に移つたのです。私は真中に子どもの腰掛ける長椅子でまわりを囲み、それを水族館にしました。その水族館の中にいっぱい鳥の剝製（おし鳥、かも等）を置き、形を作つたわけですが。これは現在考えますとあたりまえの何でもありませんが、大正六、七年のものでしては大変飛躍的なやり方でした。（そのときの記録が「婦人と子ども」大正七年第十八巻三号に掲載してあるが、参考として本誌に再録してある。）

当時学習院の幼稚園は今の四谷にありましたが、この大々的な動物園を見せてあげようということで御案内したところ、受持ちの宇佐美先生が年長の子どもをつれて、わざわざ見学にみえました。

今でも動物園遊びはやっていますがその中味は随分時代と共に材料その他の点、先生の保育技術のすばらしい進歩で内容は多少変わつてはいるでしょうが、繊細な子どもの活動から、大まかな製作活動というものに飛躍したということを思い出します。それから今で申します自由選択、自由遊びの一つでしょうが、これまでは設定された保育の状態であつたのを、廊下に出して、部屋の中にあるいろいろな材料や用具など（クレヨン・帳面・ハサミ・色紙等）を外の机の上に並べ、自由選択という形で部屋に入る前に子どもがこの部屋に入って何をするかということを考えて、積木をしようとする

思う者は積木をとって入り、絵を書こうとするものは、クレヨンと画用紙をもって入る。製作をしようと思えば色紙やハサミを持って入るといふように子どもの自由な活動を認めるようなことがなされました。私は年少組の子どもと上野動物園に遠足に行き、その後、部屋でごく小規模ではありましたが年長組の大じかけの動物園の真似ごとのようなことをしました。そのような時にも、教師のめいめいがみてきた動物園を、どこに何があったというようなことも頭の中に入れてながら作るのです。しかし材料がごく貧弱なものであったため出来上がった物も本当に貧弱で、ただ上野の動物園の一部を小さな仕事から実際の生活の中へ入れていったという形でした。このような新しい事をするということについて先生は「どんな小さな事でも、またどんな簡易なことでも自分でしようと思ったのだからさせて、その意気認めてやるのだ」という気持ちで、ちょうど幼稚園の子どもに対する態度と同じような意志表示をなさったので私共教師達も喜んで、新しい保育の一役をかったような気持ちでおります。

先生御自身はどのようなことをしていらっしやるかといえ（先生は私共には外での気持ち・ゆき方を室内に持つていくようにすすめてらしたのですが）ある日お天気の良い日に「幼稚園中みんな本校の方へ遊びにいきましょうよ。私が先頭にたつていきますからみんなあとからついていらっしやい。」とおっしゃるのです。小走りにみんなで運動場に行きますと先生が先頭にたつてぐるぐるまわり、やがて「みなさんお止まりなさい。お日様今日は」と大きな声

でおっしゃるのです。そのあと「さあ、みなさんお日様にごあいさつしたからこれで帰りましょう。」といって並んで帰ってきたのです。何んだ——と子供も教師もおもいました。これが「育ての心」の「太陽に親しむ」という気持ちの一つであったのでないかと思われまます。あとで考えますと出来るだけ都会の子どもは太陽に接してその恩恵をしみじみ味あわせるといふような説明もおっしゃったのではないかと思ひます。又庭では出来るだけ砂場の中に一緒にしゃがみ、ごちそうをもらつたり上手に子どもの相手をなさるのです。

それでも先生はどこまでも理論家ですから（實際家ではないので）意気揚々と子どもの中に、庭などにはいっていらっしやいます。子どもは本当に自分の相手として先生を扱うのですから、先生の頭の毛をくしゃくしゃにされたり、お洋服にだきつかれるのです。一方先生はなかなかのおしゃれでしたので子どもにくしゃくしゃにされること「うあー大変だ、大変だ。助けて下さい。」といつて職員室に走りこまれるのです。そこがやはり実際はなかなかむずかしいことなのだと思ひます。又附属幼稚園には大きな藤棚があり春は紫の美しい花が咲き、秋になると葉柄が落ちるのです。これで子どもたちはよく遊びました。そして藤の葉柄で、亀の甲を作つたり、げじげじを作つたりするのが教師たちも子どもたちも大きな楽しみひとつだったのです。時々倉橋先生も庭に出てお遊びになりますから倉橋先生も普通の先生と思ひ「おじちゃん」といつてご自分も仲間に入り、「おじちゃん」といつてついでくる子どももありました。

先生によくついて来たのは女の子でした。ある時藤の葉柄をひとかたまり握って二人の女兒が先生のお部屋に入ってきたのです。そして「倉橋先生、これでげじげじこしらえてちょうだい」と言うと、先生は困って（先生は手つきは器用そうなのですけれど割合に無器用なのです）しばらく考えて「先生、できないんですよ」と言われました。すると「だって倉橋先生も先生じゃないの」と女兒が言ったのです。それで先生はまいって「自分も子どもにとっては先生なのだ。だけ子ども求める物を満たしてやれない先生とはまことにすまない。」と思い、「先生できないの。ごめんさいね。」と断り子どもを主室の入口まで送ってあげたのです。このように先生は実際の中に入ろうという気持ちはありましたが元來學者であり理論家でいらしたので、なかなかそこまでおはいりにはなれないのでしよう。けれどもそれを卒直に断わって「これはいたらない幼稚園の先生」というお気持ちをおもちのようでした。保育室の中にはまだフレーベルの臭いが残っているが戸外では充分に、本当のフレーベル精神の遊びが続けられているということで先生は室内でも戸外と同じような、フレーベルが本当の子どもの友だちとして遊んだ、状態にもっていかうとも考えていらしたようです。

たまたま大正七年にひどい流感がやはり、幼稚園も閉鎖しなければならぬようになり、この頃せつかくもりあがってきた新幼稚園の雰囲気、足ぶみをしたような状態になったのです。大正八年から十一年まで、先生は文部省の留学生として海外にいらっしやいま

した。そして十一年の四月から本格的な先生の理論にあったような保育が始められました。しかし大正十二年の関東大震災で、園舎がなくなり大塚の地での仮住まいとなりました。幼稚園真諦に書いていらっしやる誘導保育という新しい本当の意味の「生活さながらの教育」になるにはやはり環境がよくないとなかなかうまくゆかないということ、震災により園舎が失われたことが誘導保育という生活そのものをそのままいかした保育がしばらく思うようにできないじたいになりました。そして大正十三年三月末にバラックに移り、それから本格的な誘導保育がなされたのです。そのような事から誘導保育の本当の先生の生活主義（生活を生活で生活へ）の保育精神がやっとバラックの園舎から本格的に発足したのです。そして昭和八年に現在の附属幼稚園の園舎に移り、この新園舎でさまざまに誘導保育の実際が展開されました。先生は同時にその状態を昭和九年に「幼稚園真諦」としてご出版になりました。これは昭和八年初めてこの大きな講堂で当時の全国の幼稚園の先生方にこの新しい本当の意味の保育、即ちフレーベルの思想をくんだ、ご自分の考えを入れた、保育精神にのっとった、実際の保育の計画および方法つまり「生活主義」の形の保育の本当の道を講義なさったのです。その講義を整理して「幼稚園真諦」をお出しになったわけなのです。その後昭和十一年「育ての心」を出版なされました。さきほど話したげじげじのこととか、お日様今日はなどそのぼそのぼの育てる気持ち（先生）を随時書いていらっしやいます。

私共幼稚園教育について戦後アメリカの指導を受けました。これによっていかにも新しい幼稚園を作っていくかのような感じをもつたものもあるようですが、結局それは長年自分（倉橋先生）がもっている幼稚園の教育の思想そのままである。また実践そのままである。自分が何十年來こういうことを主義主張としてもっているけれども、「あれは倉橋先生の自由主義教育の保育である」とか「あれは実際には、できない保育である」とかいうような批判めいたことをきいた。しかしいまアメリカの人たちの指導の保育と精神は同じで、実践もまた同様である。自分が口をすっぱくして主張した新保育がようやく受け入れられたのかという感じが強かった。

今アメリカの指導により、「このような新保育を批判なしに受けている」ということについて、「今さらながらみんながそれがわかったのか」というようなことを、私たちに倉橋先生は一人ごとのようにいっておられたことを思い出されます。

このように今の幼稚園教育の根幹は、どうしても倉橋先生のベスタロット・フレーベルの子どもの真の状態をよく理解し、その上児童心理学といった科学的な基礎の上になつて子どもの指導の原理を理解し、あわせて実際の指導の面にも細かい心ずかいを示したこの著書によって教えられることが多いのでございます。

私が倉橋先生のことをお話するにあたりましても四十年来側近にありまして沢山教えていただきましたかずかずのことごとそのものが今度、先生の著書を読み返しますことにより改めて感じ深くした

のであります。私にとりましてはこの講習は、改めて倉橋先生を勉強する良い機会を与えていただいたと思ひます。皆様方も今後いろいろな保育の理論的な研究に、また実際の研究の面に、ひとつこの倉橋先生の著書をお読みになりますと、その中からあい通ずるものがあるのではないかとおもわれます。この記念出版の書物に目をとおしていただければ結構だと存じます。さらに先生はどこまで、子どもが自然にもっているものを育てるのだ、ということが、大人（教師や親）のしなければならぬことで、大人のもっているものを、子どもの方へ好むと好まざるとにかかわらずあてがうのではないといふこの精神を、倉橋先生は私共教師の指導の精神とも、していらっしゃるやうに思います。そのため、先生から指示を受けたことが少なく、計画し考えたことが倉橋先生に批判される時に、果してそれが先生の保育理論にマッチしていたのか、保育方法にマッチしているのか全然わからないのです。私たちのしたことが先生に満足していたかどうかは全然わからないのです。「良い」とも「悪い」ともおっしゃらず、先生の保育精神と私たちのしたことが一致した時には「偶然の一致」と私共教師は考えておりました。このように「みずから育つものを育てる」という精神を私達教師に対しても持っていて下さったことは少しでも自発的、創意工夫をする精神を育てていただいたと先生に感謝していただいす。なお先生の著書をおよみいただくことにより演題の内容をおくみとり下されば幸に存じます。